

第28回

## ムガル帝国からインド帝国へ

監修・講師  
水島 司

### 学習のねらい

16世紀、中央アジアから進出してインドを支配したムガル帝国は、宗教的にも寛容な政策をとり、安定した統治に成功していた。しかし、第6代アウラングゼーブ帝による非寛容な宗教政策への変更や、領土拡張による軍事財政制度の硬直化が不満を高め、地方勢力が各地で独立を図り、互いに争うことになった。政治的な混乱の中からイギリス東インド会社は支配を拡げていき、19世紀半ばの大反乱を経て、インドはイギリスが直接支配するインド帝国となった。今回は、ムガル帝国の盛衰、植民地支配の拡大、大反乱後のインド帝国の成立過程と、富の流出と呼ばれる自由貿易体制下での植民地経済の特徴を学ぶ。

- ・ <ムガル帝国の盛衰>  
・ アクバル アウラングゼーブ 地方勢力 ジズヤ
- ・ <植民地化とインド帝国の成立>  
・ イギリス東インド会社 大反乱 間接統治
- ・ <自由貿易体制下の富の流失>  
・ 鉄道投資 本国費

### ■■■ ムガル帝国の盛衰 ■■■

ムガル帝国は、中央アジアから進出したイスラーム国家であり、少数派として多数派のヒンドゥー勢力を支配しなければならなかった。それを支えたのは、官位に応じての軍馬数維持制と、統治地域からの税収入を給与として与えるという軍事財政制度であった。また、第3代皇帝アクバルは、異教徒への人頭税ジズヤを廃止し、融和に努めた。しかし、第6代皇帝アウラングゼーブは、ジズヤを復活させて反発を買い、また、支配領域が拡大して新たな給与地が消滅したことから、軍事財政制度も硬直化した。ムガル支配に対する反発は強まり、地方勢力が反乱を起こし、アウラングゼーブ帝の死後、帝国は一気に崩壊に向かった。

### ■ ■ 植民地化とインド帝国の成立 ■ ■

ムガル帝国の弱体化と反比例して、各地の勢力が力を増し、支配の拡大を目指して激しく抗争した。イギリスやフランスの東インド会社は、これらの抗争に介入し、軍事・財政援助と引き換えに徴税権を獲得するなど戦乱状況を巧みに利用して支配を拡大した。イギリス**東インド会社**は、フランス勢力を圧倒し、19世紀半ばまでには各地の勢力も制圧して、インド全域の支配に成功した。

会社政府は、支配の拡大を目指して、間接統治下の藩王国を取り潰す政策をとっていた。その不満は、会社のインド人傭兵の火薬の包みをきっかけに爆発し、大反乱が生じた。反乱は、しかし制圧され、反乱軍に担ぎ出されたムガル皇帝も廃位され、ムガル帝国は名実ともに消滅した。そして、東インド会社に代わって、イギリス国王が皇帝を兼ね、イギリスが直接統治するインド帝国が成立した。

### ■ ■ 自由貿易体制下の富の流失 ■ ■

自由貿易の名の下に、19世紀を通じて、イギリスはインドをイギリス産業の原料供給地・製品輸出地へと変えていった。国際的には、スエズ運河の建設や電信・電話網などの交通・通信網の整備を行い、インド国内でも、イギリスの投資家に高率の利潤を保証しながらの鉄道整備を積極的に進めた。それらは、イギリスが大きな利益を確保する役割を果たすものであり、加えてイギリスにとっての富の源泉であるインドを守るための軍事行動も、インド自身の利害とは無関係におこなわれた。それらの活動はインドの人々の負担でなされ、さらには、インドで軍人や官吏として従事し帰国したイギリス人への年金支払いなども同様な形でなされたことから、インド人は「富の流出」として批判した。こうした批判は、その後民族運動へとつながっていった。

#### 考えてみよう 調べてみよう

- 18世紀までのアジアで、帝国と呼ばれる事例を探し、それらの帝国でとられていた統治システムの特徴が何かを調べてみよう。
- イギリスの北米での植民地とアジアでの植民地の広がり・消滅の過程と、その違いの原因を考えてみよう。
- インドの鉄道路線の広がり方を調べ、それぞれの路線の目的は何であったのかを考えてみよう。